

## 言語学的知識をどのように練習問題に反映させるか？

### —複合過去形の場合—

平 嶋 里 珂

HIRASHIMA Rika

Université Kansai

rika3@kansai-u.ac.jp

#### 1. 複合過去形の基本的価値と発話における様々な意味の関係

一般的にフランス語の直説法複合過去形には「過去」と「完了」という二つの意味があるとされている。しかし、複合過去形が持つ本来の意味は、事柄そのものが成立した時間より後にある基準点から事柄を捉える完了というアスペクト的価値である。この基本的価値に、事行(=動詞または動詞句)、副詞あるいは時間表現など文の構成要素の意味が加味されて、複合過去形を含む発話の様々な意味が産出される。例えば *J'ai mangé* という時、文脈によっては「食事をすませた(だから空腹ではない)」という事柄の完了による現在の状態を表すこともあるし、*Il y a trois jours, dans un restaurant très sympa* があれば過去の事柄として理解される(ex. *Il y a trois jours, j'ai mangé dans un restaurant très sympa.*)。完了用法の下位区分については、上述した「完了」の他に「経験」「結果の状態」「現在までの継続(ただし起点を示さないもの)」に分けられる。複合過去形が *déjà* と *des escargots* と共にあると(ex. *J'ai déjà mangé des escargots*)、過去に出来事が成立したか否かを発話時点で確認する「経験(～したことがある/ない)」を表す。否定 *ne~pas* と起点からの事柄の継続を表す *depuis* + 時間表現と組み合わせられると(ex. *Je n'ai pas mangé depuis hier.*)、「行為の結果の状態」という意味が生じる。*garder, aimer* のような状態動詞または *être* + 形容詞が複合過去形と組み合わせられ、さらに *toujours* のような副詞と共にあると(ex. *Il a été toujours gentil avec moi.*)、過去時から現在まで継続する事柄を表す。

#### 2. 総合教材における複合過去形を使った練習問題の現状

複合過去形の用法は外国語としてのフランス語教材の練習問題にどのように提示されているのだろうか？文法シラバスに基づいた教材であれば、それぞれの用法や下位区分の文例を提示・意味を日本語で解説し、文法問題(活用練習、作文、和訳練習など)を行うことが可能である。一方、機能・概念シラバスに基づいた運用能力養成重視の教材では、「伝える内容」に従属する形で文法要素と語彙が配置されているため、文法要素の機能は細分化され、伝える内容に対応する文法要素の一部の意味だけが提示される。このような状況で文法要素を提示し、運用練習につながる練習に反映させるためには、次のような条件が必要になるだろう：

- ・具体的な発話状況が設定されている

・「文法要素が表わす意味」と「(発話) 状況」が有機的に繋がっており、文法要素が発話の中で果たす役割を学習者が明確に把握できる

・状況の変数を変えて類似の発話状況を複数作り、運用練習・定着練習を図ることができる  
例えば入門・初級レベルのコミュニケーション中心の教材では以下のような練習が見られる。

### ① 過去(週末・休暇中)にしたことについて語る、書く：

ほとんどの教材では、複合過去形が導入される課で類似のテーマに沿って練習が組み立てられている。複合過去形を含む発話は「過去の事柄」を表す(ex. *Qu'est-ce que tu as fait pendant le week-end ? -Je suis allé au cinéma.*)。

### ② 経験したことについて語る：

①ほど多くないが、『場面で学ぶフランス語』や『Moi, je...コミュニケーション』など、日本で作られたコミュニケーションを中心とした教科書では「経験したことについて語る」というテーマが見られる。しばしば *déjà* や *jamais, une fois* などが文中に含まれ「経験」を表す。

このように大部分の教科書では複合過去形の「過去」の意味については必ず運用練習が行われる一方で、「完了」用法については運用する状況があまり設定されていない。様々な完了用法の意味を表す複合過去形は日常会話でも頻繁に使用され、多くの教科書でも文章や会話中に散見されるが、「経験」という下位区分を除いては、体系的な運用練習に結びついていないのである。

## 3. 複合過去形の完了用法の習得は難しくないのか？

ここで確認しなければならないのは、複合過去形の完了用法の様々な意味の習得は日本人にとって難しくないのかということである。複合過去形の形態および過去用法を中心とした一部の完了用法を学習することによって他の完了用法の意味を類推することができるのであれば、「完了」「結果の状態」「継続」などの下位区分について特に練習を行う必要はないからである。

形態面をのぞいて複合過去形の学習の難しさが指摘されることはあまりないのだが、完了の意味になる文を作らせてみると、しばしば現在形(ex. 「まだ決めてないの」という意味で *Je ne décide pas encore.* 「朝から食べてないんだ」という意味で *Je ne mange pas depuis ce matin.*) または半過去形(ex. 「朝から食べていないんだ」という意味で *Je ne mangeais pas depuis ce matin.*) の誤用が見られる。

これらの誤用については「今のことを話している」(現在形の誤用について)、「過去から継続している」(半過去形の誤用について)などのコメントがつくことが多い。誤用例の数が多いので断言はできないが、学習者は動詞時制形の意味内容を「過去」「現在」「未来」のような時間区分に対応させて理解していることは確かだろう。「朝から食べていないんだ」という意味に対して現在形と半過去形の誤用例が見られるが、インフォーマントが現在の状況に注目したか、状況が発生した過去の起点に注目したかによって誤用する時制形が変わるようである。いずれにせよ、学習者は事柄と発話時点の関係よりも、時の区分と事柄が与える印象(継続/非継続)などの基準にしたがって動詞時制形を選択する傾向があり、複合過去形は「現在」の事柄や「事柄の結果の状態」を述べるために使われるものとして理解されているとはいえない。このことから考えると、学習者が複合過去形の様々な意味を理解して運用につなげるためには、やはり何等かの練習、できれば具体的な状況設定をした運用練習を想定する必要があるであろう。

## 4. 複合過去形の様々な意味を反映させた練習問題を作るための問題点

しかし、過去用法と異なり、複合過去形の「完了」用法は下位区分の意味に応じて事行の種類と状況補語の共起性など様々な成立条件があることが、運用練習への応用を困難にしている。例をあげよう。「結果の状態」はしばしば *depuis* + 時間/起点との共起によってその意味が明らかになるが、この意味は、肯定文中では、複合過去形が *sortir, partir, quitter, arriver* など「結果動詞」という種類の動詞と結びついた時に生じる (ex. *Ma mère est sortie depuis ce matin. \*Sophie est allée à l'école depuis ce matin.*)。一方、否定文中では結果動詞でなくても複合過去形と結びつき「事柄が起こらなかった結果の状態」を表すことができる (ex. *Sophie n'est pas allée à l'école depuis la semaine dernière.*)。「継続」についても、多くの場合、事行の種類は「状態」を表す *être* + 属詞または状態動詞であり、副詞 *toujours* によって事行の意味内容が発話時点まで継続していることが示される (ex. *Nous avons toujours gardé le très bon souvenir de vous.*)。しかし、*se lever* のような完了動詞も、*toujours* や *jusqu'ici* など事柄の継続を表す副詞があると発話時点まで同じ行動が繰り返されてきたという意味になる (ex. *Jusqu'ici, je me suis levé cinq heures pour faire du jogging avant le petit déjeuner.*)。

一方で、学習過程の面から考察すると、入門～初級段階では過去分詞の形態、助動詞の選択、疑問文、否定文における語順の問題など形態面の学習に比重をおく必要がある。文法シラバスによる教材であれば、日本語訳を援用して、その意味に合う複合過去形の文を作る練習が初級の段階から可能である。しかし、最初に状況を設定して口頭練習中心の運用練習を行う教材の場合、発話状況と言語要素の組み合わせの関係が複雑な「結果の状態」「継続」等についてはシステムチックな練習を行うのは学習者の認知的負荷の面から考えて難しい。

こうしてみると、大多数の初級教材が複合過去形の過去用法を偏重しているのは、教育的には必要な選択と言わなければならない。学習者がバランスよく形態と意味の両面を習得していくためには、複合過去形の学習を数段階に分けて行う必要がある。学習の最初の段階では認知的負荷を重くしないように、発話状況と言語要素の組み合わせの関係が比較的単純な「過去」を中心に運用練習を行い、意味の成立条件が複雑な完了用法の下位区分については、活用や語順など形態の学習が一通り終わった段階で応用練習として取り入れるのがいいだろう。

### 5. 「意味」と「発話状況」が繋がった複合過去形練習問題の提案

複合過去形の完了用法の他の下位区分の意味、例えば「完了」や「(行為の) 結果の状態」についてはどのような場面設定が可能だろうか？助動詞である直説法現在形からわかるように、複合過去形で表される事柄は発話時点と結びついている。*Mon père est parti en voyage d'affaire depuis une semaine.*のように、事柄そのものの成否は過去時なのにそれから生じた状況は現在にかかわっているために、文全体としては現在の事柄を述べているように感じられることがあるのはこのためである。この特徴を考慮して、現在の状況の前提となる事柄（現在の状況を生み出した事柄）を複合過去形で表し、その状況を踏まえて、これから取るべき行動を他の時制形を使って表すという場面設定が可能である。

#### 問題例(1)~(3)

複合過去形の完了用法と初級のフランス語の学習項目に含まれる現在形、近接未来形、単純未来形を併用したモデル文には以下のようなものが考えられる。

- (1) *Marc n'est pas venu à la faculté depuis 15 jours. Il peut être malade. Je vais l'appeler ce soir.*
- (2) *Tiens ! Tu n'as pas encore fini tes devoirs. Alors, tu ne pourras pas sortir ce soir.*
- (3) *Tu manges encore ? C'est ton quatrième croissant ! –Parce que je meurs de faim. Je n'ai pas mangé*

depuis hier matin.

上記の例文に現れている複合過去形は「完了」(Tu n'as pas encore fini tes devoirs.)、「結果の状態」(Marc n'est pas venu à la faculté depuis 15 jours. Je n'ai pas mangé depuis hier matin.)である。複合過去形が「結果の状態」を表すためには、肯定文では事行の性質との組み合わせがかなり限定されるが、否定形と組み合わせられると状態動詞以外の動詞は「結果の状態」を表すことができる。さらに depuis + 時間を組み合わせることで、発話が「現在の状況」を表すものとして理解されやすい。

このようなモデル文をベースにした練習としては次のようなものが考えられる。

- ① 複合過去形で前提としての状況を提示し、近接未来形あるいは単純未来形で取るべき行動または結果として起こるべき事柄を述べる ((1), (2)について)
  - ② 日本語で状況設定と使用する時制形を示し、短いテキストまたは会話を作る ((1),(2),(3)について)
- ①は近接未来形や単純未来形の導入時の練習として、②は次の段階の練習として考えられる。なお、同じモデルの練習でも、使用すべき時制形を自分で考えさせるようにすると、問題の難易度は上がる。

#### 問題例(4)

完了用法の下位区分の意味がある程度学習できたら、より実践的に、「旧友と再会する」「昔住んでいた都市を訪れる」など具体的な予定を想定し、複合過去形、半過去形、近接未来形、単純未来形などを織り交ぜて、これまでの状況とこれからの予定を語る文章を作成するなどの練習を行うこともできる。

指示：日本帰国以来会っていないフランス人の友人にフランス旅行の予定を知らせるメールを書きましょう。文中には現在形、近接未来形、単純未来形、複合過去形、半過去形を使ってください。

*Cher Philippe,*

*On ne s'est pas vus depuis mon départ pour le Japon, mais j'espère que tous les membres de ta famille vont bien. J'écris ce mail pour t'annoncer une bonne nouvelle : je vais visiter Paris cet été pour un stage de français...*

メールの文章には「継続」を意味する *J'ai toujours gardé un très bon souvenir de mon séjour en France.*などを織り込むことも可能である。

#### 問題例(5)

運用練習でなくても、具体的な文脈を持った練習問題は複合過去形の完了用法の意味の定着を図るために有効であろう。これらの練習問題についても、時間表現、副詞などを含む、一見して似通っているように見えるが実は異なる複数の状況を設定し、誤用が起りやすい現在形、複合過去形、半過去形のいずれかを文脈に合うように使い分けさせるようにする。

指示： *ne pas manger* を適切な時制形に活用させてください。

- a. *Ah, j'ai faim. Je ..... depuis ce matin.*
- b. *Moi, je ..... le matin. Je n'ai pas faim.*
- c. *Avant, je ..... le matin.*

a.~c.はすべて「食べない」という事柄が問題になる。動詞の時制形の選択を決定するのは、*matin*を含む状況補語の意味 (*le matin*=習慣、*depuis ce matin*=起点 *ce matin* から発話時点までの継続) および *avant* (発話時点より前の時期を示す) の意味である。同様の問題は他の動詞についても作成可能である。

指示：( ) の動詞を適切な時制形に活用させましょう。

a. *Mince ! J'..... mon devoir chez moi. (oublier)*

b. *Je ..... le français depuis 1 an ; j'..... maintenant la conjugaison des verbes. (ne pas étudier, oublier)*

a,b どちらも事柄が完了した結果の現在の状態を表すので (a は宿題が手元にない。b はフランス語を勉強していない、活用を忘れていた) 複合過去形を使う。

これらの問題については機械的に動詞を活用させるだけではなく、動詞時制形の選択理由を学習者に説明させる、学習者同士で選択理由を話し合わせるなどの活動を組み合わせると時制形の機能を理解するために効果的だろう。

### 問題例(6)

時制形の使用が文法的に説明しにくい場合、異なる時制形を使用した場合の意味の違いを説明させる問題にすると、発話の微妙なニュアンスの違いに気づかせることができる。

指示：下線部の動詞時制形の意味に注意しながら、a,b.二つの文章の内容を説明してください。

a. *Une amie m'a invitée à aller faire un stage de français en été, mais je n'ai pas encore pris ma décision.*

*Car une autre amie m'a proposé d'aller faire un voyage au Canada en août. Je vais bien réfléchir.*

b. *Ce matin, une amie m'a invitée à aller faire un stage de français en été, mais je ne prends pas de décision là-dessus. Car je n'ai pas suffisamment d'argent pour passer un mois en France.*

a, b ともに現在の事柄を語っているが、複合過去形と現在形を使い分けることで発話者が事柄をとらえる視点が変わる。a の複合過去形は、将来は起こるべき「決心する」という事柄が、友人の誘いを受けてから発話時点まで起こっていないことを示す。b の現在形は、お金がないために、おそらく今後も「決心する」事柄は起こらないという意味である。複合過去形で表した事柄は過去から現在に至る状況の総括になっているが、現在形で表すと「決めるつもりはない」という意思表示のニュアンスを帯びる。

### 4. 結論

「コミュニケーションができれば文法を教える必要はない」という極論に象徴されるように、現在の外国語学習では文法学習は過少評価される傾向が強い。しかし、文法知識は無味乾燥な規則の集まりではなく、発話意図を相手に伝えるための道具であることを今一度思い出す必要がある。学習の様々な段階において必要となる文法練習は一様ではなく、学習段階に応じて言語学情報を使い分ければ、具体的な運用練習問題および運用能力を補強する様々な文法練習問題を作成することが可能になる。文を正確に作るための単純な繰り返し練習を超えて、微妙な発話意図を表すための練習へと変容させていくことが今後の文法教育の課題ではないだろうか。